

の探検にも従事した。こゝに是非附記して置かねばならぬことは區劃上嚴密に謂へば中央亞細亞とは區別すべきかも知れないが、これと接觸せる支那本部甘肅省の一地、燉煌の探検の次第である。甘肅省の西端に位する燉煌の名は、古く漢代以來支那の史乘に見える。燉煌に近くその南東に當る水草地に、一脈の丘陵があつて、その麓に今は吾が國にも有名になつた千佛洞がある。恰も蜂窩の様に丘腹を穿つて建て連ねた洞窟寺で、洞内には佛像を祀り、窟の内外を繪畫彫刻を以て飾ることは、諸方に存在する千佛洞と同一である。スタイン氏が第二回目の探検に於てこゝに辿りついたのは、一九〇七年の三月であつた。この時或人から、二年許り前に、砂に埋没して居つた一つの佛洞から、漢文や異體の書で書いた多くの書物を見出したことがあると聞いたので、間もなく其の調査に着手した。此の佛洞は全く砂に埋られてあつたのを、八年程前に王といふ道士が、僅かの喜捨を熱心に集めて資力を作り、二三年もかゝつて掘出したもので、漸次佛洞の内部を修繕したが、窟内の高座の佛像を取換へる際に、通路の右側の壁に少しく龜裂があつて、其の奥に室がある様に見えたので、壁を壊して見たところが、書物を充滿した一室が現はれて來た次第である。これはほど一九〇〇年の事と思はれる。室内には書物や繪畫の類が五百立方呎ばかり積上げてあつて、僅に人一人を容れる餘地が存したゞけであつたといふ。書物發見のことは早速道士から蘭州の總督衙門に報告され、數種の見本も送られたが、その見本の内容が佛典であつたが爲か、格別役人の注意も惹かず、其の儘に保存せよとの指令を得たとのことである。役人たちには、譯も分らぬ數車に餘る古書の爲に、運賃を拂つたり、保存の面倒をかけられたりするものは、定めし迷惑なことであつたらう。